幕が下りてから

安岡章太郎

幕が下りてから

昭和42年6月28日　第1刷発行
昭和42年7月28日　第2刷発行

著　者　安岡章太郎

発行者　野間省一

発行所　株式会社　講談社

東京都文京区音羽2-12-21
電話　東京（942）1111（大代表）
振替　東京3930

印刷所　豊国印刷株式会社

製本所　株式会社　大進堂

定　価　490円

© Syōtarō Yasuoka 1967
Printed in Japan
落丁本・乱丁本はおとりかえ致します。

幕が下りてから

原画　小出檜重

造本・装幀　田村義也

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

おれには何でもが見えてゐる、と永野謙介は女物の紫矢絣の袖口が手首にまつはりつくのをズリ上げながらつぶやいた。暑すぎるせゐで、頭の中はボンヤリしてゐる、しかし見えることは何でもが、じつによく見える。

初舞台のときには誰でも、自分が何をやつてゐるのか、しやべつてゐるのか、ただ夢中で、客席など眼に入らないものだといふ。謙介も、いはば常識的にさう心得てゐた。ところが、いまはこの常識があんまりアテにならないことに、かへつてマゴつかされる気持だつた。正面から向かつてくる何本もの照明が直接眼に入りでもしないかぎり、一階、二階は無論、どうかすると三階席のかなり後列の客がとなり同士で何かささやき合つてゐるのさへ判然と見別けられる……。ひとつには、これは自分が職業的な役者ではなく、べつに舞台でトチつたつてかまはない、と思つてゐるからだらう。

「どうも、この文化人歌舞伎といふのも麻薬みたいに、いつぺんやると病みつきになつて、毎年、時期がくると何かかうソワソワしてきて、仕事もサッパリ手がつかんやうになりますなア」

けさ楽屋へ入つたときから、誰彼なしに相手をつかまへては、さう繰り返へしてゐた童話作家の土屋豊喜は、鏡台のまへに並らんで坐ると、謙介にも同じことを言つた……。別段、それが嘘だとは思ひたくはなかつたが、まる味をおびた童顔の土屋氏が、妙に脅えたやうな眼のまはりに微笑をうかべながら、「芝居がはじまると思ふと、もう出たくて、出たくて、どんな端役にでもと思つて、ねえ」と、どこか子供に話し掛けることが職業的な習性になつてしまつたやうな口調で言ふのを聞いてゐると、謙介は、この老齢の童話作家がどんなに芝居好きかといふことより、いつかこの文化人歌舞伎の出演交渉を受けなくなる日のくることを、内心でどれほど惧れてゐるか知れやしないんだ、と想つてみずにはゐられなかつた。民間放送TRVが毎年、開局記念の行事にしてゐるこの芝居は、親会社のS新聞の後援で戦前から行はれてゐたものだが、民放開始当時に試験的に公開番組の電波にのせてみたところ、意外に人気をよんで、たちまちこの局の名物番組になつてしまつた。そしていまでは、一民間放送局の催しといふより、ジャーナリズムを上げてのお祭り騒ぎめいた活況を呈してをり、これに出演者として名をつらねることは、その方面での彼等の評価を位置づけるメヤスにもなりかねない勢ひになつた。すくなくとも、いつたんこれに出演しながら、次の年に出ないとなると、一体あいつはどうしたんだらう、といつた疑惑を多少とも招くことにはなる……。その意味では、たしかにこれは土屋氏の言ふとほり「いつぺんやると病みつきになる」にちがひなかつた。

「ところで、永野くん、あんたはこれが二度目、いや三度目でしたかな、この芝居に出るの

は……」

土屋氏は、鏡の中の謙介の顔を覗きこんで、ふとトボけたやうに問ひ掛けてきた。

「いえ、ことしが初めてです。じつは去年も出てみないかといふ話は、あるにはあつたんですが、ちやうどオフクロが死んだりしたあとで、家の中がゴタゴタしてゐたものですから……」

「ほう、お母さんが亡くなつた、おいくつで？」

「六十一、でした」

「ほう六十一、それはそれは、まだお若いのに……。いや、ぼくなんざ自分ぢや若いつもりでゐるんだが、あんた方から見りや、ずゐぶんのぢぢいなんでせうなア……。やつぱり若い人でなくちや、女形はやらせてくれないんだ。ぼくは、この芝居は開局以来の常連で、ことしはもう七度目なんだが、まだ一度も女形なんてムツかしい大役はもらつたことがない」

鼻の下に黒い大きな八字ヒゲを貼りつけながら、そんなことを言つてゐた土屋氏は、金モールの帽子をかぶると、立ち際にもう一度、繰り返した。「初舞台が女形とは、こりやあんた、よほど見込まれたんだな」

イヤ味だらうか？　丸い頬や、眼尻に、どこかアドケない様子の残つてゐた土屋氏の顔が、警官の制帽をかぶつたとたんに、いかにもそれらしくキビしい表情になつたのに驚きながら、謙介は鏡の中の自分の姿を見なほした。お下げ髪のカツラ、臙脂色の袴、爪先の尖つた編上げ靴……。明治時代の女大学生といふのが、謙介に振り当てられた役だ。どうして自分がこんな

役を演じるハメになつたのかはわからない。ただ、これが「ムツかしい大役」としての女形でないことはたしかだつた。それに「若い」といはれたことも、ことし三十七歳、数へなら再来年は四十になる謙介は、かへつて完全に中年男になつた自分の年齢を、いまさらのやうに意識させられた。もつとも数年まへに在野の美術展に初めて出品した画で、その年の新人賞をうけ、それがたまたま或る雑誌の編集長の眼にとまつたことから、表紙絵やカットなどをかかされてゐるうちに、なんとなく画で食へるやうになつたのは、正規の過程で画を勉強し、画壇の序列のなかで自分の画の売れるのを待つてゐるやうな人たちからみれば、トントン拍子の売れっ子といふことにもなるだらうし、そんなことから、若いくせに、売り込みだけは一人前以上だなどと言はれてゐることは、謙介自身もよく承知してゐる。このごろでは絵だけでなしに随筆めいた雑文をあちこちへ書いてみたり、テレビやラジオで風俗時評ともつかぬ掛け合ひ漫才みたいなものに出たりもして、何が本業かわからぬことをやつて暮らしてゐる。こんどの「明治時代の女大学生」といふ配役も、おそらくかうした謙介をそのまま戯画化したものにちがひなかつた。

だが、そんなことに、あれこれこだはつたのも、職人のつかふ化粧刷毛が自分の肌に下されるまでだつた。——水白粉をたつぷり含んだやつが最初に首筋に触れた一瞬、謙介は役者になつた。ヒヤリと変に現実的な冷たさが、背を這ふやうに全身に伝はり、頬骨の張つた、巾広の顔を、みるみる真ッ白に塗りつぶして行くのを眺めながら、まるで他人の顔が自分の皮膚のう

へに拵らへられるのを見てゐる気持だつた。両頰にヒノマルのやうに紅を描いたところで、もう一度、鏡を覗いてみても、たしかにそれは誰のものとも見別けのつかぬ顔だつた。（なるほど、おまへの頸は太い頸だな……）自分自身の顔に、つぶやきかけて謙介は、ふと二十年以上もむかし、学生時代の遊び仲間の一人から、同じことを言はれたのを想ひ出した。「おまへの頸は太いなあ、そんなのをジンゲルの頸つていふんだぜ」言つたあとで、その男は「ジンゲルつていふのはドイツ語で芸妓のことなんだ」と説明をつけ加へた……。暗い天井からぶら下つた裸電球の灯りが、右往左往する人の動きでユラユラ揺れる鏡の中に、シャ熊のやうな髪にリボンを結び、袴の裾から黒い編み上げ靴の足を突き出した、見るからに奇怪な女が立ちはだかつてゐる。その異様に太い喉仏のあたりに、突如、そこだけで生きものであるやうなナマナマしさが漂つてゐるのを感じ、謙介は思はず両手を自分の首筋に当てがつたが、その瞬間、白塗りの太い頸はヌーと延び、空間を跨いで自分の両手に生温くはさまれてゐた。

ギラギラする照明燈にも眼がなれてくると、その温度と人いきれに煽られた空気の厚ぼつたい重さとが、うつかりすると居眠りを誘はれさうな気だるさを感じさせる。謙介は、頭を振つたり、唇を嚙んだり、両手を握りしめたりひらいたりしながら、ときどき観客席の様子を逆に、こちらから眺め渡した。一階、二階の半分以上は招待席に当てられ、放送局や新聞社、

出版社の関係者、知名の文化人やその家族が大勢つめかけてゐる。

やつとフィナーレの音楽が鳴り出した。紙吹雪が散り、正面の背景が二つに割れて、そこから今夜のスタア連が繰り出して来る。その間、謙介たちは小旗を振り振り、足踏みしてゐるといふ段取りだ。正面から、フランス士官の軍服をまとつた青年作家の梶原や、鹿鳴館式の夜会服を着た女流詩人でシャンソン歌手の青木女史などが現れると、客席のあちこちから喚声や拍手が湧いて、その昂奮ぶりは映画スタアが登場するのと何の変りもない。事実、梶原は自分の小説を映画化するとき自分が主演したりもするのだから、かうした反応は当然のことだつた。彼等につづいて、画壇で最高の画料をとつてゐると言はれてゐる浮田薔風が、胸いつぱいに勲章をつけた海軍大将の礼服の上衣の裾をひきずるやうな恰好で登場すると、失笑ともつかぬざわめきが、そこここに聞えた。それも美術記者や画商など、事情に通じた人たちの席ばかりではなく、二階、三階の一般客の席からも同じやうな声が起つたのは、ただの偶然といふより、ここでは人が外貌だけで評価されてゐるからにちがひなかつた。美人画をかかせては当代随一と称される薔風も、アトリエでも展覧会場でもないここでは、小肥りの体をゆすつて短い脚でチョコチョコと歩く、猫背の坐業職人でしかなかつた……。勲章は薔風のたつての希望で、係りの局員や出入りの記者たちが、あちこち古道具屋などを駈けめぐつて、すべて小道具ではないホンモノばかりを買ひ集めたといふことだつたが、その重味に危く上体を前に倒しさうになりながら、股をひらいて懸命に両脚を突つ張つて立つてゐる薔風の姿は、謙介にも滑稽だつ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

た。しかし彼はそれを笑ふ気になれなかつた。薔薇の顔は額から、かたく結んだ上唇にかけて一面、汗に濡れて光つてゐる。その苦しげな、しかも恍惚とした顔を見た瞬間、謙介は自分自身、都心の一流劇場の舞台の上で、たとひどんな端役であらうと、かうやつて大観衆に向ひ合つて立つてゐるといふことが、いかにも不思議な、とても現実のこととは思へない心持になつてきた。実際、つい四五年まへには、こんなことにならうとは夢にだつて考へられたものではない……。その直後に謙介は、太腿や膝頭のあたりに何かが貼りついてくるやうな気がした。旗を振り振り足踏みしながら、なにかヒキツレるやうなぎごちなさを感じ、反射的に誰かの視線がピタリとこちらに向けられてゐるのがわかつた。

おくさんが来てゐる……。

謙介は一瞬、心に影の射すのをおぼえたが、すぐにそれは人違ひだらうと思ひなほした。いまの自分は四五年まへには夢にも考へられなかつたやうなことをやつてゐるといふ、その連想がこんな錯覚を生んだものに違ひない。急激に速くなる音楽に合せて、スポット・ライトがぐるぐる振り廻されると、舞台から見る客席はモヤが下りたやうになる。彼は、もう一度さつきの顔をたしかめておかうと、交錯する光芒のモヤの向うに瞳をこらした。そして、横巾のひろい、色白の、その顔を探り当てると、ギクリとした。おれには何でもが見えてゐる、たつたいままでさう思つてゐた。自分が、どうしてこの顔に、いまのいままで気がつかずにゐたのだらう？　実際それは、ほとんど彼の足元といつていい位置、ほぼ真向かひのカブリツキから二三

列目にあつて、穴の底から覗くやうな眼で、じつとこちらを見上げてゐたのだ。それがおくさん、つまり奥田欽一氏の夫人睦子であることは、もう疑ふ余地もないことだつた。動揺と同時に、突嗟に謙介がおぼえたのは或る落胆だつた。別に何を期待するといふことがなくても奥田夫人の顔は、それ自体でひとをガッカリさせるやうなところがある……。それにしてもどうして、こんなところに、こんなひとが来てゐるのだらう。ふだんから奥田氏は細君を人前に連れて出ることなどめつたにないし、奥田氏自身の姿もこのごろは画壇の会合などではあまりに見掛けたことがない。奥田氏が自分で文化人歌舞伎など見に来たがるわけはなかつた。見たがつたのは細君の方にきまつてゐる。いまも奥田氏は、睦子夫人の隣りの席で、居眠りでもするやうに、顔を腕組みした胸もとに埋めたままうづくまつてをり、細君だけが、白くて丸い大きな餅のやうな顔を仰向けて、ぽつてりした一重マブタの瞳を憑かれたやうに謙介の方へそそいでゐる。それは一瞥して、彼等だけが周囲から取り残されてゐるとわかるやうな、何がなしにイタイタしげなものを感じさせる二人連れだつた。ことに謙介にとつて、それは不意討ちであつただけに一層のことだ……。しばらくまへにも謙介は一度、これに似た不意討ちのイタイタしさを、別のところで、別のかたちで受けてゐた。或る盛り場の露地裏で、道傍の地べたに雑誌を並べてゐるのを通りがかりに見掛けて、ふと眺めると、なかに裸の女たちにかこまれた中年男が、半裸にストリップの衣裳をつけて笑つてゐるのが眼についた。どれもが精一杯の露骨を競つて並んでゐる表紙のなかで、とくにその肥つた半裸の中年男の色刷り写真の表紙絵が

他よりも目立つたのは、それだけが女より男の顔を正面に大きく出してゐたせゐだらうが、謙介は何気なく傍へ近よつて、あらためてその表紙を見てみようと覗きかけながら、おもはず中途で眼を外向けた。そのデップリ突き出した腹だの胸だのに花びらやら何やら銀紙細工を貼りつけて、いかにも脂ぎつた中年男を誇張したどす黒い笑顔を見せてゐるのが、じつは奥田氏であることを認めたからだ。いつたい、なんで奥田氏がこんなことをやつてゐるのか、またこの雑誌がどうして奥田氏にこんなことをやらせたのか、そこにどんな事情や理由があるのかは、わからなかつた。ただ謙介はそのとき、妙に血なまぐさいものでも見たやうな、怕さと、イタイタしさと、そのくせ自分の不潔な利己心をクスグられる快感と、そんなものが一緒くたになつて、ひどく困惑させられた……。いま観客席の椅子に、脱ぎ棄てられた厚手の外套のやうに、うづくまつた奥田氏の体軀にも、あのときのイタイタしげなものは残つてをり、ことによればそれは謙介一人の印象ではなく、この劇場に来合せた画壇文壇の人たちのなかで奥田氏のことを多少とも知つてゐる人なら、誰でもが感じてゐることなのかもしれない。すくなくとも、奥田氏がこのごろ、かうした会合にめつたに姿を見せなくなつたのは、氏自身がさういつた空気を肌身でなんとなく察知してゐるからにちがひない。このなかで、そんな奥田氏のイタイタしさに誰よりも無関心なのは、おそらく細君の睦子夫人だらう。

相変らずだな、謙介は、奥田夫人のまるで美容院の釜から鋳型でぬいたばかりのやうな頭髪や、ずんぐり盛り上つた肩からエリの合せ目にかけて、なんとなく体つきとはチグハグな、う

すねずみとも何ともつかぬ漠然たる色合ひの和服姿を、舞台の上から見下ろしてイラ立たしげにつぶやいた。――おそらく、このひとには夫の悩みも周囲の冷たさも、何一つわかつてゐない。さういふトンチンカンなところが、この髪型や和服の着こなしにも現れてゐる。むろん彼女は、この程度にめかしこむにも、彼女なりにずゐぶん苦心して、たぶん何日も前から今晩のために努力したにちがひない。箪笥のヒキダシを一日に何回もあけたてして、同じ着物をひつくりかへし、とつくりかへし胸に当てて鏡を覗いたり、貯金箱からありつたけの銅貨をさらへて勘定し直し、これで新しい足袋をコッソリ買つても大丈夫だらうかと思案したり、やつぱり古いのをよく洗濯してみようかと考へたり、そんな苦労を、つんでは崩す積み木あそびのやうに、数限りもなく試みたことだらう。奥田氏を、今晩ここへ出て来るやうに納得させるまでには、どんな手だてが使はれたものかわからないが、結局のところ彼女の、同じことをどれほど繰り返へしても倦きるといふことのないシンネリムッツリした根のよさに、奥田氏は負かされたのだらう。それは単に根気が強いといふのではなく、その根気が何に対する執着から起つてくるのか、彼女以外の人間には誰にもてんでわからないといふところに、もう一つの強みがあつて、ワケのわからないことを執念ぶかく、しかも一見おとなしさうな顔つきで、いつまでも繰り返へされると、最後には誰もがこのワケのわからなさに引き込まれて、ついうつかりうんと言はされてしまふのだ……。舞台の上から奥田夫人を見下ろして、謙介は夫人の白くて狭い額ごしに見上げる真つ黒な瞳のなかに、そのウンザリさせられるやうな同化力を、心のどこか

で憶ひ起してゐた。

実際、何のつもりで、こつちばかり見てゐるのか？　謙介は奥田夫人の瞳に、何をどうしろと言はれてゐるのかわからない、そのくせ切つても切つても切り離せない粘りついてくる強さに、馬鹿馬鹿しく退屈なものを感じた……。だが、その直後、夫人が眼差しのなかに見せた微妙な変化は、ほとんど彼を動転させた。謙介の眼と眼がぶつつかると夫人は、はりつめた黒い瞳を放心させたやうに弱め、こちらへ投げかけてきたかと思ふと、ふと耐へかねたやうに眼蓋を伏せた。相手の視線をねじ伏せたといふ自己満足が謙介をよろこばせたのは、ほんの束の間に過ぎなかつた。一瞬後に彼は、俯向いた夫人の狭い額に、これまでにない不思議な感情が浮かび上るのを認めた。それはハッとするほどの冷たさと、やさしさとが絡み合つたまま、静かに無言で訴へかけてくる情緒、つまりあの憐憫といふものにちがひなかつた。と同時に彼は、いつか盛り場の露地裏で、道傍の地べたに並べられた雑誌の表紙絵のなかに奥田氏の半裸の写真を見つけたときの、イタイタしさを憶ひ出した。あれと同じナマグサさが、いまはおれ自身の体の内側から湧き出して、あたり一帯に漂つてゐる……。

謙介は、コメカミの両側から脳を挟んで絞めつけられる痛みをおぼえ、思はず頭を強く振ると、かぶつてゐたカツラがぐらりと、うしろへ脱げ落ちさうに揺れた。その拍子に、赤いリボンで束ねた髪が、どさりといふ感じで、首筋から背中へかけて垂れ下がり、重味と粗い手触りが、何かエタイの知れぬ動物の毛並みをおもはせて、ふと冷くなつた猫の死骸でも頭に乗せて

ゐるやうな、不潔な無気味さが全身に伝はつてきた。

「危い」

と誰かに袖をひかれて、二、三歩、後退させられた謙介の眼の前を、埃っぽい風を捲き上げながら、分厚い緞帳が、重量に加速をつけて、一気に下りて行った。

「いや、ほんとに危かったですよ。幕の下りてくるときには、よほど気をつけてないと……。なにしろ緞帳ってやつには鉛の棒が縫ひこんであるんで、クロウトの役者でも、よくあれに頭やなんかをぶつつけて大怪我をした例が、ずゐぶんとあるさうですからね」

謙介は、たもとの袖を引っぱった土屋氏がさう話し掛けるのに、ただ機械的にウナづきかへしながら、頭の中では眼を伏せた奥田夫人の表情だけを追つてゐた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.